

# 英国小説のキャノンと帝国

——『マンズフィールド・パーク』の場合

坂 田 薫 子

## 序

エドワード・サイード (Edward W. Said) の著作『オリエンタリズム』 (*Orientalism*, 1978) を契機に、1970年代後半から、文学批評の一つの形態としてのポストコロニアル批評が注目されるようになり、それ以降、それまではコロニアリズム (植民地主義) やインペリアルイズム (帝国主義) とは無縁と考えられてきた文学という知的領分の中にも、植民地支配を正当化する言説を見出そうとする批評活動が盛んに行われている。特にサイードの『文化と帝国主義』 (*Culture and Imperialism*, 1993) に触発されるかのように、次々と英国小説のキャノン (正典) にもポストコロニアル批評のメスが入れられ、様々な議論が行われている。

そこで本論文では、サイードが『文化と帝国主義』で最初に論じたジェイン・オースティン (Jane Austen) の『マンズフィールド・パーク』 (*Mansfield Park*, 1814) を取り上げ、英国小説の正典と見なされているこの作品にどのように大英帝国が表象されているのかを再確認した上で、ポストコロニアル批評が、この作品の抱える諸問題にどのような回答を与えうるかを考察してみたい。

## 1. 『マンズフィールド・パーク』の疑問——ファニー・プライス批判

『マンズフィールド・パーク』はしばしば「問題のある」<sup>プロブレマティック</sup>作品であるとか、「難解な」<sup>ディフィカルト</sup>作品であるという評価を与えられる。<sup>1</sup> そしてその原因の一

端は、ヒロイン、ファニー・プライス (Fanny Price) の「魅力のなさ」にあると評されることが多い。<sup>2</sup> ファニーに魅力がないと言われるのは、彼女がまるで当時のコンダクト・ブックから抜け出してきたかのように、モラルに富んだ発言をし、常に正しい態度を取るからである。<sup>3</sup> 確かに、『高慢と偏見』(Pride and Prejudice, 1813)の主人公エリザベス・ベネット (Elizabeth Bennet) のように、茶目っ気たっぷりで魅力的なメアリ・クロフォード (Mary Crawford) が排除される一方で、読者の共感を得にくいファニーに幸せが約束される結末には爽快さや明るさが欠けている。ファニーに幸せをもたらすエドモンド・バートラム (Edmund Bertram) との結婚はどこか近親相姦を臭わせ、多くの読者はこの小説のいわゆるハッピー・エンディングを手放して喜ばずにいる。<sup>4</sup>

研究者たちは、オースティンは「魅力のない」ファニーを主役に据えることにより、この小説で何かモラルを説こうとしていると考え、ファニーを何らかの主義主張を体現する人物として読解しようとする。例えば、オースティンが姉カサンドラ (Cassandra) に宛てて書いた手紙の中にある一節を取り出し、『マンスフィールド・パーク』のテーマをエドモンドの「オーディネーション牧師の叙任式」に見出せば、『マンスフィールド・パーク』は世俗性を象徴するメアリと宗教性を象徴するファニーの間で揺れ動く牧師エドモンドの葛藤と成長を描いた作品ととらえることが可能になり、ファニーはキリスト教徒が守るべき価値観を体現する「クリスチャン・ヒロイン」として解釈されることになる。<sup>5</sup>

あるいは、対フランス政策の著しかった当時の社会背景を考慮に入れた上で、ファニーをフランス革命期前後のフランス的価値観の対極に存在する、伝統的で保守的なイギリス的価値観を体現するヒロインと見なし、『マンスフィールド・パーク』を、都会から浅薄で不道德な価値観を持ち込もうとするクロフォード兄妹の侵入からファニーがマンスフィールド・パークを守る様子を描いた、政治色の濃い作品として解釈する読解法もある。<sup>6</sup>

さらには、そこにマルクス主義批評を加え、荘園制に基づくマンスフィー

ルド・パークの存続を救うのは准男爵家の直系の子どもたちではなく、退役軍人の娘ファニーであることから、旧き良きイギリスの価値観を受け継ぎ、イギリスの未来を担っていくパワーを中産階級に見出すという読み方もある。<sup>7</sup>

そして、ファニーが戦っている相手はフランス的価値観といったような外側からの圧力ではなく、実はマンスフィールド・パークを、ひいてはイギリスという国を支えている内側の価値観ととらえる読解法もある。フェミニズム批評は、『人間の権利の弁護』(*A Vindication of the Rights of Men*, 1790)と『女性の権利の弁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792)によって伝統的な家父長制に基づいた家族、国家システムに異議を唱えた、メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft)の登場がもたらした当時のフェミニズム運動の影響を『マンスフィールド・パーク』に見出す。<sup>8</sup>

しかし、イデオロギーを説く作品として読んでもなお、従来問題視されてきている作品の難解さの説明はつく一方で、ファニーのヒロインとしての魅力のなさを解明することには至っていない。例えばファニーをクリスチャン・ヒロインと見なしたり、伝統的なイギリス的価値観を体現するヒロインと見なしたりする場合、最終的には「悪」に打ち勝つことのできる彼女の強靱な意志を強調する目的で、ファニーは当初魅力に富んだ、強力な「悪」の前では実に無力で、ひ弱な様相を呈しているのかもしれない。しかし、その身体的虚弱さと精神的陰鬱さは、彼女とは逆の価値観を象徴するクロフォード兄妹に「誘惑」されるマンスフィールド・パークの住人たちにとってだけではなく、読者にとっても、必ずしも好ましいものには映らない。なぜメアリ(の体現する価値観)よりもファニー(の体現する価値観)の方が、あるいはファニーもメアリと同じくらい魅力的と感じられるような、説得力のある人物設定になっていないのかには、明確な回答は与えられない。<sup>9</sup> そのために、ニーナ・アウアーバハ(Nina Auerbach)のように、ファニーをゴシック・ロマンスのモンスターたちになぞらえ、敢えてファニーの負の魅力について分析する論文まで登場するのだろう。結

局ファニーはヒロインとしては魅力がないという結論はなかなか塗り替えられずにいる。

## 2. ポストコロニアル批評

しかし、この問題を解決する一つの読解法がサイードの『文化と帝国主義』の第二章第二節、「ジェイン・オースティンと帝国」によって始まったポストコロニアル批評に見出せるかもしれない(と言っても、サイード自身はファニーの魅力のなさを解明するためにこの節を書いたわけではないのだが)。『マンスフィールド・パーク』の中に表象された大英帝国を読み取るというポストコロニアル批評による読解法は、この作品の難解さの原因を、ファニーの魅力のなさから大いにずらして論じることを可能にしてくれる。なぜなら、ポストコロニアル批評はこの作品の中心人物はファニーではなく、むしろサー・トマス・バートラム (Sir Thomas Bertram) であるという別の物語論に正当性を与えることに成功しているからである。

それではまず、サイードによる『マンスフィールド・パーク』論をまとめ、次にその後のポストコロニアル批評による『マンスフィールド・パーク』論の展開について整理してみよう。

### 2.1. サイードの『マンスフィールド・パーク』論

英国小説は「大英帝国の帝国主義的拡張の正当化に関与している」(100)と考えるサイードは、『マンスフィールド・パーク』全体を貫いて言及される登場人物の一人、サー・トマスの海外所有地の存在に着目し、「オースティンが『マンスフィールド・パーク』の中でアンティグアに言及し、それを利用している以上、読者の側もその言及の歴史的誘惑性について具体的に理解しようとする、それ相応の努力を求められている」(106-7)と主張する。サイードによれば、サー・トマスの財産の出所として他にも設定の方法があったものを、アンティグアという海外所有地こそが「サー・トマスに富をもたらし」、「国内外における彼の社会的地位を確固たるものに

している」(73)という設定を選択していることで、この小説は「植民地所有の權益こそが国内の社会秩序と道徳的優先事項の形成に直接貢献している」(73)ことを示そうとしている。『マンズフィールド・パーク』では、サー・トマスが屋敷を留守にして植民地の荘園の管理にかかりきりになっている間にイギリスの地所では様々な手違いが生じる一方で、彼が帰国すると直ちに秩序が回復する様子が描写されているが、サイードは本国でのサー・トマスの支配の再確立の描写から、「彼がアンティグアの『プランテーション』でこれとまったく同じことをしていたと仮定することができ」(104)、「オースティンはマンズフィールド・パークを保持し、支配することと、帝国を保持し、支配することは密接に繋がっていることを明確に理解していた」(104)と結論付け、この小説を「拡大していく帝国主義的企てを支える構造の一部」(114)として読む必要性を説く。

サイード本人が予言しているように、一度彼によって「イギリス国内に帝国主義文化を広く拡大する可能性を切り開いた小説」(114)という烙印を押されてしまうと、『マンズフィールド・パーク』という小説は、もはや「浅ましい歴史的現実とは無関係であるとか、それを超越している」(114)などと語ることは許されなくなり、大英帝国のイデオロギーが編み込まれたテキストとして広く読まれるようになった。

## 2.2. サイード後の『マンズフィールド・パーク』論

サイードの『文化と帝国主義』以後、<sup>10</sup> 枚挙に遑がないほどのポストコロニアル批評に基づいた『マンズフィールド・パーク』論が出版されている。<sup>11</sup> しかしそのほとんどは、サイードに倣ってオースティンを帝国主義の共犯者と見なすよりもむしろ、オースティンは植民地主義、特に奴隷制の在り方に疑問を呈しているという見解を取っている。ここで代表的な論文をいくつか例示してみよう。

まず、真っ向からサイードの論に反対したのはスーザン・フレイマン (Susan Fraiman) である。フレイマンによると、サイードの『マンズフィー

ルド・パーク』論は、マンスフィールド・パークは道徳的秩序と正しい人間関係の象徴であり、そのマンスフィールド・パークの安泰を保証するために行われているサー・トマスの植民地での活動は容認されるべきであるという疑わしい前提に立っているが、オースティンは実はこの作品でマンスフィールド・パークの道徳的腐敗を批判している。サイドはファニーがマンスフィールド・パークの後継者だと言っているが、オースティンはファニーを次のマンスフィールド・パークの女主人にはしていない。オースティンはトム・バートラム (Tom Bertram) を回復させ、ファニーを周縁に置くことで、マンスフィールド・パークの象徴するものに軽蔑心を表そうとしている。フェミニズム批評による読解を重んじるフレイマンは、『マンスフィールド・パーク』において西インド諸島の奴隷制は父権制の象徴として機能していると主張し、権威というものに対するフェミニストとしてのオースティンの批判に、サイドがあまりに不注意であると指摘する。

フレイマンほど正面からサイドを非難することはないものの、オースティンが帝国主義文化のイデオロギーの担い手であるというサイドの考え方を否定し、オースティンは国内外における不在地主制度批判を行うことで、植民地主義や帝国主義に反対していると唱える研究者も多い。例えばジョセフ・ルー (Joseph Lew) は、サー・トマスを植民地から帰国した入植者の典型と、そしてファニーをサー・トマスに反抗する人物ととらえて『マンスフィールド・パーク』を読み解く。帰国後のサー・トマスの独裁振りは、(ディスコース上の道徳的腐敗の象徴である) 植民地の気候に影響された結果で、アンティグアで奴隷たちに絶対的権力を振るってきたばかりの彼には、ファニーの反抗は反逆に等しく、奴隷たちに食事を与えずに服従を導き出したのと同じ方法でファニーを追放するのだとルーは説く。ルーは、マンスフィールド・パークの姿は大英帝国の縮図版であり、オースティンはイギリスが帝国化することに伴う弊害を作品内に描いて見せたと結論付ける。

こうしたサイドと反サイドの言わば中間点に立ち、サイドの『マ

『マンスフィールド・パーク』論に多少の修正を加えて見せたのがブライアン・サザム (Brian Southam) である。まずサザムは『マンスフィールド・パーク』を植民地主義文学 (小説) と見なすサイドらの読解は「歴史的」な読みなので、作品の時代設定を決定する検証が必要だと説く。サザムによると、『マンスフィールド・パーク』の舞台の中心は 1810 年から 1813 年で、問題を孕む第二十一章は 1812 年 10 月である。1807 年に奴隷貿易が廃止された後も、奴隷貿易は秘密裡に行われており、1812 年の段階ではこの問題は厄介な問題であったため、ファニーの鋭い質問に、奴隷を所有し続けているサー・トマスは当然答えることができない。こうした読みからサザムは、オースティンはサイドが言うようにサー・トマスの側に立っているとは考えられず、オースティンはファニーを奴隷制廃止論者として描き、当時の読者の賞賛を買ったに違いないと結ぶ。

このサザムと同じ年代設定を用い、オースティンを奴隷制廃止論者と見なして『マンスフィールド・パーク』を論じる研究者も多い。一方で、フェミニズム批評で『マンスフィールド・パーク』を読むモイラ・ファーガソン (Moir Ferguson) は、奴隷解放を求めるに至らないオースティンの限界を指摘する。『マンスフィールド・パーク』におけるイギリス白人女性はアフリカ系カリブ人たちに相当し、オースティンはジェンダー間の関係を批判しているものの、結局のところ支配者階級を正当化していると考えられる。『マンスフィールド・パーク』は 1807 年の奴隷貿易廃止後の世界を描いた物語で、閉鎖的で残酷な伝統的植民地政治に反対している一方で、奴隷解放という選択肢はまだ反乱者たちの押し殺された声を通じてしか示されない。オースティンはサー・トマスを典型的な帝国主義的西インド諸島大農園経営者から、心を入れ替えた情け深い領主へと変化させたに過ぎない。サー・トマスのディスコースは無傷のままで、支配者階級と被支配者階級の間、男性と女性との力関係はまったく変わらずに保たれている。ファーガソンは、本国と海外における植民地主義者の新しい漸進主義的政治手段への望ましい移行を暗示するにとどまるオースティンの試みの、偏狭さと

限界を指摘する。

他方、ジョージ・ブルコス (George E. Boulukos) は、オースティンは確かに奴隷制廃止論者ではあるが、彼女のスタンスはむしろ “ameliorationism” であると説き、昨今のオースティン批判の行き過ぎを是正する。“ameliorationism” とは奴隷制と植民地主義は道徳的に改善が可能であるという考え方である。まずブルコスは大半のポストコロニアル批評家たちとは異なった視点から「パートラム家の沈黙」を解説する。ファニーとサー・トマスの奴隷貿易に関する議論は楽しいものであって、沈黙はいとこたちの無関心が生み出したに過ぎない。ファニーは伯父が奴隷を所有していることを非難しようとしたのではなく、伯父が奴隷を適切に扱っていることを褒め称えようとしているとブルコスは指摘する。サイドは奴隷制は語ってはならないものという前提に立ち、ポストコロニアル批評家たちは「パートラム家の沈黙」を広く社会の沈黙と取り、社会全体が自分たちの経済が頼みにしている植民地での暴力行為を周縁化しようとしていると考えがちだが、こうした解釈は、奴隷貿易が廃止された十九世紀初頭、奴隷制に関する議論が活発に行われており、破ってはならない沈黙など存在しなかったことを完全に見落としている。また、奴隷制廃止論者は奴隷貿易を廃止しようとしたのであって、植民地の存続そのものは否定してない。彼らは受け入れられる形の奴隷制を模索したのであり、“ameliorationist” は、上流階級の不在大農園所有者が下層階級の悪漢である現地監督者に眼を光らせさえすれば、奴隷の状態は改善され则认为ていた。そうした時代背景から、ブルコスは、オースティンはサー・トマスを自発的に自らの領地に出かけて行くという、改善への適切なステップを踏める理想の不在地主として描いていると考える。『マンスフィールド・パーク』は “amelioration” を追求しているのであれば、奴隷を所有することは受け入れられるばかりではなく、道徳的に褒められるべきことであった時代性を映し出している作品なのだとブルコスは結論付けている。



### 2.3. ポストコロニアル批評内の差異

2.2. で例示したようなサイド以降のポストコロニアル批評と、サイド自身の『文化と帝国主義』の間に大きな差異を生み出しているのは、まず、マンズフィールド・パークが秩序、道徳などを体現する理想像であるという前提に立っているか否かである。サイドがマンズフィールド・パークを理想と見なしているのに対し、多くのポストコロニアル批評家たちは、マンズフィールド・パークは、そしてその支配者であるサー・トマスは腐敗しており、改善の必要性があるという視点から『マンズフィールド・パーク』を読み解いている。実はマンズフィールド・パークを理想と位置付けるか否かという問題はポストコロニアル批評に限ったことではない。本稿の第一章で取り上げた『マンズフィールド・パーク』読解法のうち、保守派はマンズフィールド・パークを守るべき伝統を体現した理想像ととらえているし、フェミニズム批評はマンズフィールド・パークを家父長制の象徴ととらえ、嫌悪する。

そしてもう一つの大きな違いは、サイドが、『マンズフィールド・パーク』はヒロイン、ファニーがマンズフィールド・パークの、そしてサー・トマスの価値体系に取り込まれていく様子を正当化してみせたいと説くのに対し、多くのポストコロニアル批評家たちが重要視するのは、マンズフィールド・パークの当主であるサー・トマスが（そしてその後継者であるトムが）、時代の変化に応じて良い方向へ変われるかどうかの方にあるという点に存在している。そしてポストコロニアル批評家たちの多くは、サー・トマスはファニーによって、そこに限界はあるものの、感化されたと読んでいる。

### 3. 『マンズフィールド・パーク』の疑問を解く

では、こうした様々なポストコロニアル批評に基づいた先行研究を大いに利用すると、本稿の第一章で取り上げたような、当初の「問題」にどのような回答を与えることが可能になるのかへの試論へと進んでみよう。

## 3.1. ファニーは「ヒロイン」なのか

『マンズフィールド・パーク』の中に表象された大英帝国を読み取るというポストコロニアル批評は、この作品の「中心」人物はファニー・プライスではなく、サー・トマスであるという大幅なずらしを行うことを可能にする。もちろんサイドも他のポストコロニアル批評家たちも、『マンズフィールド・パーク』の主人公はサー・トマスであると明言しているわけではない。サイドも、オースティンが『マンズフィールド・パーク』で示そうとしているのは、「別個に見えながらその実一つに収束していく二つのプロセス、すなわち、アンティグアを含むバートラム家の経済秩序にとってファニーが重要になっていく様子と、様々な挑戦や脅しや不意打ちをものともしないファニーの志操堅固さ」(102)であると述べ、あくまでも作品の視線がファニーの動向に向けられていることを認めている。しかしその一方で、サイドの『文化と帝国主義』には次の有名な下りが存在している。

『マンズフィールド・パーク』では、サー・トマス・バートラムの海外所有地が全体を貫いて言及される。この海外所有地は彼に富をもたらし、彼の不在の原因となり、国内外における彼の社会的地位を確固たるものにし、彼の価値観を許容しうるものにするわけで、この価値観にファニー・プライス(並びにオースティン自身)が最後に同意してしまうのである。(73)

つまり『マンズフィールド・パーク』の「中心」に位置しているのはサー・トマスなのである。これは他のポストコロニアル批評でも同じである。2.3. で述べたように、ポストコロニアル批評による『マンズフィールド・パーク』の関心は、マンズフィールド・パークの当主であるサー・トマスが本国とアンティグアの領主としてどう改心していくことができるかにある。となると、ポストコロニアル批評に準拠すれば、ファニーが読者にとって小説のヒロインとして魅力があるか否かという議論そのものの必要性が疑問視されることになる。サイドが主張するように、オースティンは帝

国主義文化のイデオロギーの拡散に協力しているのであろうと、その後のポストコロニアル批評家たちが主張するように、オースティンは奴隷制廃止に賛同し、奴隷所有者たちの啓発を行おうとしているのであろうと、読者にとって肯定的に映るか、あるいは否定的に映るかが大変重要になる登場人物はファニー・プライスではなく、サー・トマスの方となるわけである。

### 3.2. なぜファニーに「魅力がない」のか

次に、たとえ「中心」人物がサー・トマスだとしても、なぜファニーが魅力なく描かれているのか、ポストコロニアル批評を活かすとどういう回答が可能だろうか。多くのポストコロニアル批評は、サー・トマスを奴隷所有者、<sup>プランター</sup>入植者、<sup>コロニアリスト</sup>植民地主義者、<sup>インペリアルスト</sup>帝国主義者などととらえる一方で、ファニーを奴隷の象徴と見なし、論を進めている。この論に準拠すれば、ファガソンのようにファニーを“grateful Negro”の系譜でとらえようと、ピーター・スミス (Peter Smith) のようにファニーを虎視眈々と反乱の機会を狙う異分子ととらえようと、ファニーが魅力的に描かれ得なかった理由が見えてくる。なぜなら、もしもファニーが植民地の奴隷の置き換えであるなら、帝国主義のイデオロギーを尺度に測った場合、彼女は本国イギリスの領地マンスフィールド・パークの正当な相続者たちに比べれば、人間として劣っていて、取るに足らない存在として周囲の者に扱われ、また作品内でそのように表象されることが前提となり、是認されていることになるからだ。こうした差別的な前提を読み取ることができるからこそ、サイドによる糾弾が的を射たものとして、昨今のポストコロニアル批評による『マンスフィールド・パーク』論が可能になるわけである。

### 3.3. ハッピー・エンディングの意図

しかし、ポストコロニアル批評を利用すると、3.2. とはまったく逆のアプローチで、近親相姦を臭わせるものとして否定的に読まれることのある

結末に新たな解釈を与えることが可能になる。フランク・ギボン (Frank Gibbon) の詳細な伝記調査に基づいたポストコロニアル批評に沿って、サー・トマスはアンティグアの出身、言い換えると、昔イギリス本土から植民地に渡った入植者の子孫だとすると、彼はシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の『ジェイン・エア』 (*Jane Eyre*, 1847) に登場するメイソン (Mason) 家の人間と同様に、イギリス人の血を受け継ぐ白人である一方で、生粋の白人とは区別されたクレオールと呼ばれる立場に位置することになる。すると、彼よりも、そして彼の子どもたちよりも、プライス家の娘であるファニーの方がいわゆる「イングリッシュネス」の正当な後継者となる資格を有していることになる。<sup>12</sup> となると、異分子と呼ばれるべき人物はファニーではなく、むしろパートラム家であり、ポストコロニアル批評以外にもイギリスを象徴する場所として読まれることの多い、旧き良き伝統的マンスフィールド・パークは、ファニーがエドマンドと結婚することによって、本来の正しい継承者の手に無事戻っていかうとしている、と読むことが可能になってくるのである。それはどこか、エミリー・ブロンテ (Emily Brontë) の『嵐が丘』 (*Wuthering Heights*, 1847) がポストコロニアル批評で読まれるとき、植民地の奴隷との間の混血として解釈されるヒースクリフ (Heathcliff) (とその血を引く者) が、最終的にアーンショー (Earnshaw) 家とリントン (Linton) 家の家系図から完全に抹消されていく様子を連想させる。<sup>13</sup>

## 結びにかえて

もちろんこうした解釈はあくまでも試案でしかない。サイドの問題提起を契機として盛んになったポストコロニアル批評が主張するように、オースティンは『マンスフィールド・パーク』を執筆することで帝国主義文化のイデオロギーを拡散しようとしていたのか、あるいは奴隷制を批判しようとしていたのか、それとも彼女は自分の著作が帝国主義と係わりをもつであろうとはまったく意識していなかったのか、という根本的な問題自体

に明確な答えが存在してないのに、作品の抱える諸問題に対して、ポストコロニアル批評に準拠して回答を与えてみることに有意性があるのかと問われれば、返答の仕様がないうのも確かである。しかし、本論文で示したように、サイドによる問題提起以降、『マンスフィールド・パーク』に帝国主義文化のイデオロギーが見え隠れするという事実は今や明白な事実として認識されており、今後も帝国主義が十九世紀イギリスの言説に与えた影響について十分考慮した上で、『マンスフィールド・パーク』と大英帝国の関係について、より詳しい研究がなされていくべきであることに疑問はないであろう。

注

1 サザーランド (Kathryn Sutherland) は『マンスフィールド・パーク』の批評史を次のように紹介している。原文のまま引用する。

Austen's most designed and designing novel, its ideological programme is both oppressive and puzzling, insistent and yet difficult to pin down. Equivocally labelled as her most experimental and most modern novel, *Mansfield Park's* problematic status has been rationalized in the best English literary tradition: it has long been agreed that this is Austen's most complex and profound *and* her least likeable novel. (vii)

2 ファニーの魅力のなさを指摘する論文として有名なものは、トリリング (Lionel Trilling)、ハーディング (D. W. Harding)、タナー (Tony Tanner) のものである。

3 例えばハント (Linda C. Hunt) がファニーをコンダクト・ブック・ヒロインととらえ、論文を書いている。

4 ファニーとエドモンドの結婚を近親相姦という視点から分析している研究者はジョハンナ・スミス (Johanna M. Smith)、ハドソン (Glenda A. Hudson)、クリール (Eileen Cleere) などである。

5 『マンスフィールド・パーク』と「<sup>オーディネーション</sup>牧師の叙任式」との関連性について詳しく分析している論文としては、早いものではブラントン (Clarence L. Branton)、エッジ (Charles E. Edge)、ドノヒュー (Joseph W. Donohue, Jr.) のものが、最近のものではカロノス (Michael Karounos) のものなどが挙げられる。なお、拙論「エドモンドの物語として読む *Mansfield Park*」も参照されたい。

6 『マンスフィールド・パーク』を保守的な価値観を描いた小説として読んでいる研究者はバトラー (Marilyn Butler)、ロバーツ (Warren Roberts)、モナガン (David Monaghan)、プーヴィ (Mary Poovey)、サーレス (Roger Sales)、チュイト (Clara Tuite) などである。

7 例えばイーストン (Fraser Easton) がマルクス主義批評で『マンスフィールド・パーク』を分析している。

8 フェミニズム批評で『マンスフィールド・パーク』を分析している論文は数多くあるが、代表的な論文としてよく引用されるのはカーカム (Margaret Kirkham) とジョンソン (Claudia L. Johnson) のものである。ただし研究者の中には、ギルリイ (Eileen Gillooly) のように、フェミニストの可能性を秘めているとして、ファニーよりもメアリの方を肯定的に読む者もいる。

9 ファーガス (Jan Fergus) は、オースティンは『マンスフィールド・パーク』において正しさと魅力を切り離して描くことで、読者が判断を下すことを難しくしようとしていると分析している。

10 ただし、もちろん中には『文化と帝国主義』を待たずに、既に『オリエンタリズム』に触発されて、今日で言うポストコロニアル批評で『マンスフィールド・パーク』に見られる植民地問題を論じた論文も存在している。

11 次から次へと登場する様々なポストコロニアル批評の行き過ぎに憂いを抱く研究者もいる。ウィルトシャー (John Wiltshire) はポストコロニアル批評で『マンスフィールド・パーク』を読解することの有効性を疑問視し、「ポストコロニアル批評が『マンスフィールド・パーク』を植民地化してしまった」(303)と嘆いている。

12 ファニーの「イングリッシュネス」について考察しているのはミ (Jon Mee) である。

13 『嵐が丘』をポストコロニアル批評で読み解いている論文としてよく取り上げられるものは、年代順に、ヘイウッド (Christopher Heywood)、スネイダーン (Maja-Lisa von Sneidern)、マイヤー (Susan Meyer) のものである。

#### 引用文献

- Auerbach, Nina. "Jane Austen's Dangerous Charm: Feeling as One Ought about Fanny Price." *Jane Austen: New Perspectives*. Ed. Janet Todd. New York: Holmes & Meier, 1983. 208–223.
- Austen, Jane. *The Cambridge Edition of the Works of Jane Austen*. 9 vols. Ed. Janet Todd. Cambridge: CUP, 2009.
- Boulukos, George E. "The Politics of Silence: *Mansfield Park* and the Amelioration of Slavery." *Novel* 39.3 (2006): 361–383.
- Branton, Clarence L. "The Ordinations in Jane Austen's Novels." *Nineteenth-Century Fiction* 10.2 (1955): 156–159.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. 1847. Ed. Michael Mason. London: Penguin, 1996.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. Ed. Pauline Nestor. London: Penguin, 1995.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. 1975. Oxford: Clarendon P, 1999.
- Cleere, Eileen. "Reinvesting Nieces: *Mansfield Park* and the Economics of Endogamy." *Novel* 28.2 (1995): 113–130.
- Donohue, Joseph W., Jr. "Ordination and the Divided House at Mansfield Park." *ELH*

- 32.2 (1965): 169–178.
- Easton, Fraser. “The Political Economy of *Mansfield Park*: Fanny Price and the Atlantic Working Class.” *Textual Practice* 12.3 (1998): 459–488.
- Edge, Charles E. “*Mansfield Park* and Ordination.” *Nineteenth-Century Fiction* 16.3 (1961): 269–274.
- Fergus, Jan. *Jane Austen and the Didactic Novel*. Totowa, New Jersey: Barnes & Noble, 1983.
- Ferguson, Moira. *Colonialism and Gender Relations from Mary Wollstonecraft to Jamaica Kincaid: East Caribbean Connections*. New York: Columbia UP, 1993.
- Fraiman, Susan. “Jane Austen and Edward Said: Gender, Culture, and Imperialism.” *Critical Inquiry* 21.4 (1995): 805–821.
- Gibbon, Frank. “The Antiguan Connection: Some New Light on *Mansfield Park*.” *Cambridge Quarterly* 11.2 (1982): 298–305.
- Gillooly, Eileen. *Smile of Discontent: Humor, Gender, and Nineteenth-Century British Fiction*. Chicago: The U of Chicago P, 1999.
- Harding, D. W. *Regulated Hatred and Other Essays on Jane Austen*. Ed. Monica Lawlor. London: Athlone, 1998.
- Heywood, Christopher. “Yorkshire Slavery in *Wuthering Heights*.” *The Review of English Studies* 38.150 (1987): 184–198.
- Hudson, Glenda A. *Sibling Love and Incest in Jane Austen's Fiction*. Basingstoke: Macmillan, 1992.
- Hunt, Linda C. “A Woman's Portion: Jane Austen and the Female Character.” *Fetter'd or Free?: British Women Novelists, 1670–1815*. Eds. Mary Anne Schofield and Cecilia Macheski. 1986. Athens, Ohio: Ohio UP, 1987. 8–28.
- Johnson, Claudia L. *Jane Austen: Women, Politics, and the Novel*. 1988. Chicago: The U of Chicago P, 1990.
- Karounos, Michael. “Ordination and Revolution in *Mansfield Park*.” *Studies in English Literature, 1500–1900* 44.4 (2004): 715–736.
- Kirkham, Margaret. “Feminist Irony and the Priceless Heroine of *Mansfield Park*.” *Jane Austen: New Perspectives*. Ed. Janet Todd. New York: Holmes & Meier, 1983. 231–247.
- . *Jane Austen, Feminism and Fiction*. 1983. London: Athlone, 1997.
- Lew, Joseph. “‘That Abominable Traffic’: *Mansfield Park* and the Dynamics of Slavery.” *Jane Austen: Mansfield Park*. Ed. Claudia L. Johnson. New York: W. W. Norton & Company, 1998. 498–510.
- Mee, Jon. “Austen's Treacherous Ivory: Female Patriotism, Domestic Ideology, and Empire.” *The Postcolonial Jane Austen*. Eds. You-me Park and Rajeswari Sunder Rajan. London: Routledge, 2000. 74–92.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women's Fiction*. Ithaca: Cornell

- UP, 1996.
- Monaghan, David. *Jane Austen, Structure and Social Vision*. London: Macmillan, 1980.
- Poovey, Mary. *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*. Chicago: The U of Chicago P, 1984.
- Roberts, Warren. *Jane Austen and the French Revolution*. 1979. London: Athlone, 1995.
- Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. 1993. London: Vintage, 1994.
- . *Orientalism*. 1978. New York: Penguin, 1995.
- 坂田薫子「エドモンドの物語として読む *Mansfield Park*」(『京都教育大学紀要』A 第 94 号、1999 年、67～80 頁)
- Sales, Roger. *Jane Austen and Representations of Regency England*. 1994. London: Routledge, 1996.
- Smith, Johanna M. “‘My Only Sister Now’: Incest in *Mansfield Park*.” *Studies in the Novel* 19.1 (1987): 1–15.
- Smith, Peter. “*Mansfield Park* and the World Stage.” *Cambridge Quarterly* 23.3 (1994): 203–229.
- Sneidern, Maja-Lisa von. “*Wuthering Heights* and the Liverpool Slave Trade.” *ELH* 62.1 (1995): 171–196.
- Southam, Brian. “The Silence of the Bertrams: Slavery and the Chronology of *Mansfield Park*.” *London Times Literary Supplement* 17 Feb. 1995: 13–14.
- Sutherland, Kathryn. “Introduction” to Jane Austen’s *Mansfield Park*. London: Penguin, 1996. vii–xxxiii.
- Tanner, Tony. *Jane Austen*. Basingstoke: Macmillan, 1986.
- Trilling, Lionel. *The Opposing Self: Nine Essays in Criticism*. 1955. Oxford: OUP, 1980.
- Tuite, Clara. *Romantic Austen: Sexual Politics and the Literary Canon*. Cambridge: CUP, 2002.
- Wiltshire, John. “Decolonising *Mansfield Park*.” *Essays in Criticism* 53.4 (2003): 303–322.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman and A Vindication of the Rights of Men*. Ed. Janet Todd. Oxford: OUP, 2008.